朝日新聞 鳥取版　平成３０年１１月７日掲載

内視鏡検査「オエッ」軽減

のど広がるマウスピース

開発されたマウスピース（手前）と口に入れた状態を再現した模型

食道や胃などを内視鏡（胃カメラ）で検査する際、のどを通るときに催す嫌な吐き気の軽減につながるマウスピースを、鳥取大医学部付属病院（米子市）とゴム製品メーカーが共同で開発した。奥歯でもかむ馬蹄形にしたことで、前歯だけでかむ従来の筒型マウスと比べて安定し舌の位置も下がって、のどが広がるため不快感が減らせるという。

鳥大病院とメーカー開発

開発に関わった耳鼻咽喉科医で、のどの動きに詳しい藤原和典准教授によると、不快感は内視鏡が舌やのどの壁に触れることで反射的に起きる。筒型は前歯だけのため不安定で緊張感からのどの奥も狭くなり、検査が難しくなるという。外れると歯で内視鏡が傷つくこともあった。消化器内科医から「検査が楽にならないか」との相談が開発のきっかけになった。

新製品は適度なかみ心地がある軟質の樹脂素材を採用した。歯全体でかむことで安定し、のどの奥も広がることで内視鏡が触れにくくなって不快感が減らせるという。

新開発したマウスピース。受診者の負担も減らせるという＝いずれも米子市西町

10人を対象にした実験では、挿入時の吐き気の回数は筒型よりも8割以上減り、検査を受ける際の苦痛や内視鏡医のストレスも改善される結果が出た。少しでも楽に検査を受けられることで病気の早期発見と治療につなげられるという。

メーカーは防水用パッキンなどを生産し、鳥取市にも生産工場がある「イナバゴム」（大阪市西区）。付属病院が2014年に開講した「医療機器開発人材育成共学講座」に参加し、16年に県の医療機器開発支援事業に採択されたことを受けて開発に携わった。今回、医療分野への新たな取り組みになったという。

付属病院によると、地域企業との共同開発で11商品を誕生させたが、医療機器の登録は初めてという。新製品は2個で2500円で消毒すれば再利用できる。1日から医療機器販売会社（岡山市）を通して販売を始めた。付属病院では順次、新製品に切り替えるとしている。

付属病院で5日に記者発表した原田省院長は「少しの工夫でのみ込みにくさを改善させた画期的な発明だ。医療現場で採用されて患者のために役立てば」と期待した。（杉山匡史）